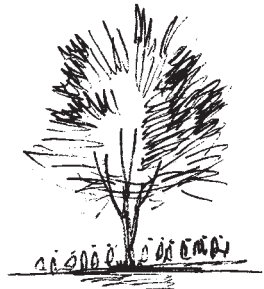


光の子



No.189 2019.3.20

●年間聖句 人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。
(マタイによる福音書7章12節より)



「桜舞う修了式」

表紙絵・中島由起子

「春が来て」

今朝春の空を覆へる鳥の声

春がきて日暮が好きになりけり

どの木にも水の匂ひがついて春

いちはやく点りし灯より冴返る

朧より朧へ通ふ水の音

暮れかねてゐる老人のまはりかな

春の日暮は擦り寄ってくるやうに

黛 執

2歳からここで暮らしていた彼女たちも18歳を迎えこの春「自立」へのスタート地点に立ちました。今日までずっと応援していただき本当にありがとうございます。

それぞれの春に

施設長 竹花 信恵

これまでの歩みは危なっかし、これでもかと試されるかのようにいろいろありすぎる毎日でしたが、まず

無事に生きてこれたこと、そのこともうれしく、決して当たり前なことではないことを思い感謝致します。

新聞、テレビ等でも次から次へ、子どもを取り巻く事件、いのちを奪われる事件が大きく報

道されました。いのちが失われる前に、もつと前にできることがあったはず、してはいけないことがあったはずということに対して弁解の余地はありません。

子どもの養育という現場にいる

ひとりとして子どもにただ頭を下げたい思いが致します。一回だけの人生の大切さ、かけがえのなさをわかってはいるはずなのに断ち切らせてしまいました。

事件のような親子関係のように最も近い最も密な関係のあいだに、人として踏み込まなければならぬ代わりには生きてはできませんが、少なくとも子どもたちが生きやすくなる働きを再度模索してまいります。

光の子どもの家にとつてもやり直さなければならぬ一年でした。社会の中では不祥事があると「利害関係の有無」や「客観性」「公平性」「第三者の意見」が求められます。それはそうだろうと考

えながらも何か釈然としないと感じていたら、新聞の投書欄に「不祥事当事者が解決を」とありまし

た。「他者の視点で提言してもらえれば公平というのだろう。しかしなぜ当事者が解決しようとしな

信頼を生むのだと思う。」

(読売新聞1月17日)

問題解決能力があるなどとはとても言えませんが、はっとさせられました。話し合いを重ね、得たことを振り返りつつ次につなげてまいります。これまでの大切にしてきたことは大切にしてまいりませう。後悔としてただけではなく、ではどうすればよかつたのかというところまで考えていきたいと思

います。自分のちからのなさに甘んじるのではなく、意見を聴きながら総力を結集していくことの大切さを学ぶことができました。これからは最も大切な視点として「安心できるかどうか」子どもの側にたつて考えていきます。

思春期真っただ中、関わることにそのこと自体が難しい子どもが引きこもりながら次に備えている様です。あの人のせい、こいつのせい、親のせい、誰のせいでもない自分の人生を引き受ける決心ができた時が自立のサインなのだろうと思

います。ここにいる間に失敗したらいいと何回声に出してきたでしょう。でも社会は寛容ではなくなり、ゆるしてはもらえない範囲の圧迫感を私自身感じています。せつかくここ

までがんばったのに、という事柄も、もつたいたい結末にしたいありません。

社会にでる不安、「まだまだ、まだ足りない」という彼女、彼からの叫びがじわじわと入り込んでくる思いが致します。彼の人生の大切な時に関わった、その重い事実が少しでもより良い結果につながることをできるように願っています。

怒りやあきらめや、投げやりな気持ちは一朝夕に何とかできるものではなくそんな気持ちだけを理解できるようにになりました。それらを風船のように抱えながらも飛んで行ってしまっていない子どもたち。糸が切れてしまわないように、風が強すぎないように願っています。

どのように子どもたちを受け止めていくか、会うたびに大きくなっていく子どもたちそして、社会にでるひとりひとりのことをこれから守り導いてくださるよう

にこれから願っています。寒い冬に、春の準備が確実になされていることを想います。それぞれにすてきな春が訪れますようにこれからもお祈りよろしくお願

い致します。

2019年の賀状にこんなことを書いてある。

「——80歳の声を聞いて、なにか急に人生の最終章を迎えたような気持ちになっています。——ものの考え方の方向性が、

老いて益々活躍する人たちに会う

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

未来へ向かって進むと言うよりも、死を

想定して、そこから逆向き

に進んだと

ろに現在があるという認識

に変わってきたような気が

します。——」

実感であつた。うつとい

うわけではな

いが、さりとて、晴れるこ

とはない。そんな気持ち

で、招待を受けたニューイ

ヤークンサー

トを、妻と2人で聞きに出かけた。作曲家山形喜直の童謡などを歌ってきた山形出身の歌手松倉とし子が主演したコンサートであった。彼女のご主人が同じロータリーに属しているご縁で

ある。

息子の松倉望と一緒にウエストサイド物語の「トゥナイト」を熱唱し終えたときの松倉とし子の顔は輝いていた。どんなにか嬉しかったことだろう。子を持つ親としてその気持ちが良く分かった。

話はその先にもあった。後半のプログラムは、彼女と鹿島武臣との二重唱から始まった。しばらくはただ聞きほれていた。すばらしく歌がハーモナイズしているのである。失礼ながら、鹿島武臣という方を知らなかった。こんな時はスマフォである。品の悪い観客になって、下を向いてグループで調べた。ポニージャックスバリトン歌手とある。ポニージャックスといえ

ば、我々の年代には懐かしいボーカルグループで、「ちいさい秋みつけた」などの歌があり、きれいなハーモニーを奏でた人たちという記憶はうっすらとあった。

の歌声になにか寄り添って歌っているような感じで、そんなことはあり得ないのだが、彼女の声を聞いた後に、それに調和する音を選んで声帯を震わせているのではとさえ感じさせた。なにせ鹿島武臣の声の音色が優しいのである。

と、歌の間に挟まれるトークの中の言葉で私は打ちのめされることになる。彼女のトークのなかで「鹿島武臣は85歳である」ことが告げられたのである。我を忘れてウッと唸った。80歳のロータリークラブ会長などと、少し誇らしげに言っていた自分が恥ずかしくなった。85歳でよくあんな声が出るものだという驚きが先に走ったが、彼の長めのトークから、85歳でよくもあんなに前向きに生きていられるものだという感慨がその後に残った。すべては、もの考え方、感じ方から事は生まれてくるのだと感じさせられた。

「——死を想定して、そこから逆向きに進んだところに現在がある——」などと屁理屈を宣わっている御仁には、声帯はまだ機能していても、人に寄り添う歌など歌えないのである。この話をロータリーの新年会の挨拶で触れた。話し終わって

席に帰った私に、パストガバナーのお一人が、即、話を継いで言った。「小菊姐さんは95歳だよ」。私は「85歳などまだ鼻たれ小僧ですね」と、答えざるを得なかった。実は、山形に三味線の名手の小菊姐さんという名物芸妓がいて、彼女の年が95歳なのである。小菊さんのお孫さんが踊りの上手な芸妓なのだが、小菊さんの三味線で踊ると、若いお孫さんには失礼な話であるが、三味線の凄さに、どうしても小菊姐さんの方に目が行ってしまうという話を聞いた事があるが、実は私にも同じ経験がある。小菊さんは酒豪である。そのことに話を向けると、「私はこれで生きていくから——」と言葉が返ってくる。

無理なこじつけかもしれないが、鹿島武臣さんと小菊姐さんの笑い方は少し似ている。含羞を含んだ笑いとでも言おうか。お二人とも、大きなことを言わないで、コツコツと芸を磨いてきたのであろう。

※編集委員会注

「パストガバナー」ロータリークラブの地区管理役員経験者

「共育ちカンガルー日記」

(51) 五年二組

近藤みちる

寒さが緩み始めた2月の終わり、5年生最後の授業参観があった。優希がお友達と歩いて登下校するようになってからは、私が学校に足を運ぶ機会もめつきり少なくなり、久しぶりに訪れた5年2組の教室は、子ども達の背丈が伸びたせいなのか、手狭になったように感じられた。

授業が始まると、大勢のギャラリーに最初は落ち着かない様子の優希だったが、大好きな理科の実験ということもあって、次第に集中力を取り戻し、グループの輪に加わって実験に取り組み始めた。

教室の隅から子ども達の様子を眺めていた私に、支援員さんが声をかけてきた。

「最近、私もこうして遠巻きに見守ることが多くなりました。クラスのお友達は、優希ちゃんのことをよくわかっていて、世話を焼き過ぎるでもなく、さりげなくフォローしてくれています。ほどよい距離感で、とても自然な関係ですよ」。

5年2組での優希の様子は、

交流級の先生からの連絡ノートでも、時折伝えてもらっていた。優希の苦手とする活動や課題でも、お友達のリードがあれば頑張って取り組めるのだという。そのリードが優希には絶妙な加減で、先生も感心するほどののだとか。確かに、運動会の組体操にしろ音楽集会の合奏にしろ、優希には荷が重すぎるだろう課題でも、お友達と一緒に乗り越えることが出来た。

入学前に学区外の園に通っていた優希には、入学式が初対面という同級生がほとんどで、1年生で初めてクラスメイトになった子ども達は、この「不思議ちゃん」の優希に大いに戸惑っていた。道徳の授業という形で、優希の特性について先生から話をしてもらったこともあった。その後子ども達は、一生懸命に優希と仲良くなろうとして熱烈的なラブコールを送ってくれるようになったのだが、優希にはかえって負担となり、逆にクラスから足が遠のくようになってしまった。

てしまった。2年生になると、休み時間のたびにみんなでなかよし級（支援級）に遊びに来てくれるようになったのだが、またしてもそれが裏目に出て、今度はお友達から逃げ回るようになってたりもした。

せっかくのお友達の厚意を無にするような優希の態度に、私も随分と気を揉んだものだ。だが、みんなの優しさは、深いところで優希にしっかりと届いていたのだと思う。学校の方針で3年、4年、5年と毎年クラス替えがあったことも幸いした。同級生のほとんど全員が一度は優希のクラスメイトになったことで、優希とみんなの距離は着実に近づいていった。この5年2組というクラスにたどり着くまでに、子ども達の間には、こうした時間が流れていたのだ。

みんな本当に大きくなったな、としみじみ思った。そして今ここに、当たり前のように優希の姿があるということが、どれほど貴重なことなのかを、思わずにはいられなかった。

「6年生も同じクラスになるといいね！」
帰りがけ、私にその声をかけてくれたのは、1、3、5年生と同じクラスになった男の子のママだった。

「そうだね。また一緒になりたいね」。

そう答えながら、私はふと、5年生になったばかりの頃、彼女からこんな言葉をかけられたことを思い出した。

「優希ちゃんママさ、『優希と仲良くしてくれてありがとう』なんて、わざわざ言わなくていいんだよ。クラスメイトなんだから」。

彼女は1年生の頃から、私がクラスメイトの保護者に対して、優希のことで何かにつけてお礼やお詫びを言って頭を下げている姿を、ずっと見てきたのだ。

「子ども同士、みんなお互いさまだよ」。

そんないかにも彼女らしい、温かくてストレートな物言いの中に、私はそれまで自問し続けてきた「共生」というものの本質を見た思いがした。「優希」と「みんな」とか「支援級」と「交流級」とか、分け隔てをしっていたのは、他でもない私自身だったのかもしれない。目から鱗とはこのこと。優希はもうとつくに、みんなの中の一人だったのだ。何かが胸にストンと落ちた瞬間だった。

あるお友達が、こんなことを
(7頁左下へ続く)

我が家の庭に、庭と言っても雑草が密生している所に、アカンサスの株が青々としている。このアカンサスという植物は、古代ギリシアの有名な建築物の柱を思い出させる。

アカンサス連想／ラツテ

彫刻家 中島 睦雄

古代ギリシアの建築と言え
ば、何と言っ
ても最初に頭
に浮かぶの
は、アテネの
アクロポリス
の丘にあるパ
ルテノン神殿
であろう。こ
れは、ドーリ
ス式神殿とい
うものである
が、別な場所
にあるコリン
ト式神殿とい
うものも良く
知られている
。この、コ
リント式神殿
の柱頭に、ア
カンサスの葉が二段や三段に装
飾化して付けてある。

我が家にあるアカンサスは、
知り合いの人が大分以前、ギリ
シアから持って来たというの
を、分けてもらって植えたもの
である。

これが、毎年、青々とした肉
厚の葉で力強く伸びる。

私は、このアカンサスを大事
にしている。とは言っても、特
別に手を入れる必要はない。自
分の力で生き生きと成長し、茂
っているからである。

ところで、私も何年前か前、ギ
リシアに旅したことがあった。
勿論、憧れのバルテノン神殿に
も行った。バルテノン神殿は、
冬空をバックに、気品に満ちて
立っていた。しかし、廃墟であ
る。古代のギリシアに於ける幾
度かの戦争等によって、内部が
破壊されて、今はガランドウに
なっている。数十本の大理石の
柱が主である。

しかし、ペンテリコン山の上
質の大理石のみによって作られ
たと言われるこの神殿は、文字
通り廃墟である。神像アテナパ
ルテノスは、影も形もない。し
かも、神殿と一体化していたた
くさんの彫刻群は、剥ぎ取られ
てしまつて、今はヨーロッパの
美術館の宝として納まつてい
る。しかし、それでもバルテノ
ン神殿は、古典建築の中の最高
傑作であると言われている。
わたしはここを訪れた時、勿
論バルテノンの周辺をまわつ
て、見とれていた。

そんな時、オリブの木の
下で、8センチ立方くらいの大
理石の塊を拾った。神殿が破壊さ
れた時に飛び散った一部分だつ
たのであろう。私は、記念に持
つて帰ろうと思つてカバンに入
れた。重いけれども嬉しい重み
である。

ところが、あちこちに「一切
の石片を持ち帰ることを禁ず
る」という立て札がある。

仕方がない。その石を置いて
きてしまった。残念であった。
しかし、神殿を飾るたくさんの
彫刻群を剥ぎ取つて、自国に運
び込んでしまったイギリスのエ
ルギン卿にくらべたら、私の罪
たるや微々たるものであったの
に、と、残念でならなかった。

○
友達がやつて来た時、私の居
る部屋を見て「ラツテだなあ」
と言つた。「ラツテ」なんと久
し振りに聞く言葉であろう。
「そう、ラツテなんだよ」と私
も言い返した。

何十年も以前、私が子どもの
頃、大人たちはこの言葉を普通
に使っていたものだが、いつの
間にか使わなくなつていた。し
たがつて、何十年振りかで聞く
この言葉に懐かしさを感じたも
のである。「ラツテ」つまり『乱

雑』とか『乱態』などという、
整然としない状態をラツテと表
現したのだらう。

ところで、と話が発展してい
つた。「そう言えは古い方言が
なくなつてきたよなあ」「そう
そう、テレビなどの関係か標準
語的になつてきたんだよなあ」
と。昔は、ジャンケンをする時
に「ヤンカンチ」と言つた。と
ころが、所によつては「チンカ
ンポイ」と言つたり「キツキノ
ウン」などと言う所があつたと
聞いた事がある。ウソ！と言
うのを「チクラツペ」と言つた
り、当時の年寄りには「そんな
たあ、チクダンベ」などと言つ
たものである。そんな事を探し
てみると、まだまだ幾らでも出
てくる。「こつちへ来いよ」と言
うのを「こつちへ来やっせ！」
と言つたり「こつちへやべ」「こ
つちへ来てクラツセ」など、時
代が進むにつれて、古い言葉が
使われなくなるのは自然であろ
う。私自身、現代社会に於ける
横文字やカタカナ言葉などわか
らないものがたくさんある。
時代はどんどん進み、私は置
いていかれてしまつた。
「少し待つてクラツセ」と言
いたい。



仙道家 奥寺 美鈴

インフルエンザの流行りも落ち着き、子どもたちは毎日元気に過ごしています。そんな中、担当の岩崎が休みの日には、子どもの成長や頑張りが大きく表れる瞬間があります。

年中の亜紀は、「今日まりっぺ（岩崎）休み？」と聞き、休みだと伝えると「今日いい子だったらまりっぺにいい子だったって言ってね！」と自分なりに頑張ろうとします。

小1の正宗は、夕方を過ぎると1人で2階の部屋に行くのにも足踏みをするのに、1人で丁寧に頭と体を洗ってお風呂に入れます。褒めて「まりっぺに言おうね。」と言うと、正宗は「まりっぺには内緒ね。まりっぺに洗ってもらいたいから。」と……。

高2の鮎子は、幼児の寝る前の読み聞かせをやるからその間にお風呂入っていいよ！なんて言ってくれて、絵本を読んでくれます。

岩崎の前ではみんな甘えていてもこんな事も出来るんだと感心する……。そんな瞬間がある岩崎休みの1日です。

佐藤家 田口 貴子

先日は雪が降り、まだまだ寒い日々が続いていますが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。

2月の節分、今年も鬼が、佐藤家にもやってきました。吉尚は今年も鬼に勝てるだろうかと思いましたが、案の定鬼の来訪に心底恐怖し、テーブル下に潜り込んでいました。それでも担当が豆を渡すと何とか2粒ほど投げつけることができました。昨年はうつむいたまま、しがみついて泣いていただけだったのに、大きな成長だと思えます。今年の鬼は早々に去ってくれたので、吉尚曰く「泣かなかった！」節分でした。隣で見ていた限りではうるうるしてパニックになってしまったが、確かに泣かずに鬼退治できた立派な節分だったと思います。本来の節分の意味合いとは違っていますが、毎年幼児たちにとっては恐怖の節分。一方で鬼退治ができれば大きな自信になります。来年はもっと強気な鬼退治ができるだろうと成長を願うばかりです。

原田家 岩瀬 志穂

また新たな年度が始まります。不安と期待が入り交じった4月、入園、入学の季節です。体のわりにランドセルが大きく感じられ、ランドセルにしょわされる子、まあたらしい制服に腕を通し、制服に着させられている子……。そんな初々しく、不安と期待を胸にドキドキしている姿を見ると、こちらまでそんな気分になります。

そんな子たちも数年で慣れていき、ランドセルが小さく感じられるようになり、制服もしっくりきてきます。そう思うと感慨深いものがあります……。

一生懸命幼稚園、小学校、中学校、高校に行く子たちを、家ではやすらぎ、明日への活力となるよう見守っていきたいと思っています。子どもたちと共に成長できればと思います。

倉澤家 倉澤 智子

倉澤家で生活する4名のうち、中学3年生が1名、高校3年生が2名ということで、進路について具体的なことを考えなければならぬ年明けでした。

高校3年生1名については、あせらずゆっくりこの先のことを考えていきたいということで、来年度も倉澤家で生活を送ることになりました。

もう1名は、1月に企業から内定をいただき就職が決まりました。ただ来年度の生活場所については現時点では未定、検討中です。担当者の私としては、まだまだ心配なことが多く、できればあと1年くらいは手元に置きたいという思いもありますが、それが本人にとって良いことなのかどうか、判断に迷うところです。

中3の1名については、高校進学を希望、週3回塾にも通い、がんばっています。進学先については、いろいろ考えた結果、私立の通信制を選択。公立高校よりひと足先に入試と合格発表があります。

桜の花満開のころ、各々の新しい生活が始まります。そんな子どもたちにとって倉澤家の生活が落ちついた、心なごむ生活になるよう、そして、帰って来たい場所になるよう笑顔で送り出し、笑顔とおいしいごはんを迎えたいと思っています。

牧野 家 牧野 由紀子

先日、家のメンバーでアイススケートに出かけた。日向と美樹は2回目のスケート。二人が初めてのスケートに行った時、私は同行していなかったが、二人とも数時間ですいすいと滑れるようになっていたと聞いた。その二人の「また行きたい」「今度はママ（担当）も一緒に滑ろう！」というリクエストがあり、今回は一緒にアイスアリーナへ。

到着すると、二人はすぐにリンクに出て上手に滑っていた。私はというと、スケート靴をはいたが、リンクに踏み出せないでいた。そんな担当者を見つけ、美樹と日向は「ほら、来て!!早く!!大丈夫だからつかまって!」と親切に手を差し出してくれる。しかし、私は子どもの時以来のスケート、そして当ても二人のようにス

イスイと滑れた記憶がない……。手をつかんだまま本気で転んだら二人を巻き込んでしまう……。 「ちょっと待ってて!」と、私はまず壁だけを頼りに、自主練をすることにした。担当者が壁にしがみついているのを見て、日向と美樹は弱点を見つけたとばかりに「おもしろいんだけど!!」と大喜び。その後、自主練のかいあつて? 少しでもリンクを滑れるようになった私の手を二人はひっぱりながら「ママ、上手になったね」「滑れるようになったじゃん」と褒めてくれた。



学習参観 佐藤 義岳

本園の子どもたちが通う小学校の学習参観がありました。大雨の昼休みを図書室で過ごしていた凛は、開口一番「えんどろうは?」。 やっぱり担当者に来てもらいたいですよね。(もちろん、遠藤も授業を見に行きました。)

花梨は大好きなまりっぺが見に来ると顔が緩み、ママ(担当の岩瀬)が来ると「きりっ」とした風で「がんばる私」をアピール。 実のところ、参観日用に着飾った授業よりも、子どもの素の姿が気になるものです。休み時間はどの子と遊んでいるか、困っている様子はどうか、誰に助けを求め、助けてもらえるか。下校準備はスムーズにできるか、子どもが教室を出た後のロッカーや机の中は片付いているか……。

授業中なら、子ども同士で交流する場面に注目します。花梨は、グループをつくって(道徳劇の)役を決め、練習する活動の場面で、どうしていいか分からず固まってしまいました。すると、近くの子がトントンと肩を叩いて仲間に入れてくれました。花梨は最後までがんばることができました。 富士雄は、隣同士で意見を発表する学習場面で、はじめ相手の子

がふざけて相手をしてもらえませんでした。しかし、富士雄が何度も「やろうよ」と言っていたら、お互いに発表することができました。私たちは富士雄の言動を時に「しつこいな」と感じてしまうのですが、諦めないでやり続けることができるという良さでもあるのだなと気付かされる瞬間でした。 私たちも、子どもたちが「大事にされている」「諦められていない」と感じられる場面をたくさんつくろうと思わされる参観日でした。

(4頁から) 言ってくれた。

「優希ちゃんて意地悪しないし、いつもおんなじ。だから一緒にいるとホッとするんだ。」

そう、優希は優希のまま、いい。いや、優希のまま、が、いい。私の心には、そんな風に聞こえた。

5年2組で過ごす日々も、もう数えるほどになった。もうじき6年生だなんて、実に早いものである。

春泥に列を乱して登校班

みちる

虐待としつけ

理事長 菅原 哲男

今年度の終わりが見え始めた頃、私たちの心胆を寒くするよ
うな子ども虐待事件が起きた。

千葉県野田市の小学4年生、
栗原心愛さん(10)が自宅で親に
よって殺された。この事件は、
報道などによって痛ましい事実
が次第に明らかになってきてい
る。心愛さんに対する傷害容疑
で再三逮捕された父親・勇一郎
容疑者。母親・なぎさ容疑者が
虐待の様子を撮影していたこと
もわかり、長時間立たせたり、
食事を与えなかったこともあつ
たという。

父親に虐待される我が子を、
どうして母親は守ることができ
ないのか。どうして児童相談所
などの関係機関は判断を誤るの
か。そして、なぜ悲しい事件が
繰り返されてしまうのか。そう
いったことを考えてみる。

父親が、家庭の中で絶対的な
力を持ち、暴力に依って家族を
支配する。そんな家族の風景が
半世紀前の日本には珍しくはな
かった。

さて、子どもたちの不幸を飯

の種にして半世紀を超えた。

千葉の心愛ちゃんだけでは無
く、虐待の疑われる子どもたち
で満杯になりそうな光の子ども
の家で出会う親たちに共通して
いる表情や心理的傾向などに
は、自らの生き方や人生に、相
当な不全感を抱えている者がほ
とんどである。しかし、自らの
生き方に不全な感覚を持つ者は
全ての人間だと言ってもいいと
思うのだが。

自分の生き方や人生に不全な
思いや感覚を持つことと、虐待
をなすこととの関連について考
えよう。

虐待をした親たちのほとんど
がしつけをしただけだと言い張
る。今日も、全国の児相では、し
つけと虐待の違いについて議論
や思索をしていることだろう。

しつけとは社会生活に適応す
るために望ましい生活習慣を身
につけさせること。基本的生活
習慣のしつけが中心になるが、
成長するにつれて、家庭、学
校、社会などの場における行動
の仕方へと、しつけの内容が拡

大していく。しつけの目標は、
社会生活の秩序を守り、みずか
ら生活を向上させていくことの
できる社会人に育て上げること
である。また、しつけを効果的
に行うためには、成長段階に応
じた適切な方法をとることが必
要であることを弁えなければな
らない。社会生活への適応に必
要な望ましい生活習慣を形成す
ること。

自らの生き方に不全な感覚し
か持てない親たちは、子ども
に、特に父親と概ね親和的な
娘、母親ならば息子などに、社
会に出ても通用するようなマナ
ーや礼儀などを持たせようとす
る。

自分と同じように生き方に不
全な感覚を持つて欲しくない
という気分が子どもに閃く姿勢
につながる。だからひどい対応
にもしつけをしたと言いつ張るの
だろう。

しつけはした方がいいが虐待
にならないように心しなければ
ならない。

さて、このところの虐待報道
についていささか申したいこと
がある。

踏み外しや不適切な行為をな
した者についてかなり厳しい社
会的制裁をしすぎるように思え

るのだ。

ほんの些細な間違いも赦さな
い社会である。だからしつけは
厳しくなる。そこで、しつけと
虐待は接近していく。

しつけとは、社会生活への適
応に必要な望ましい生活習慣を
形成すること。子どもに幼児期
から礼儀・作法を教え込むこと
をいうようになり、(躰)の字
が用いられるようになったとき
れる。もとは神の意になつたさ
労働の型や手順を習得させ、子
どもを一人前にすることをさし
た。躰はその社会や文化に制約
されるが、子どもを道徳的習熟
に導く教育の過程であり、躰の
仕方は人格形成に大きな影響を
もつものだろう。

一方、この社会は、間違えた
りした者を赦さない感覚で満ち
あふれている。盗人にも三分の
理を探してはくれない。

自分の人生について不全感を
持つところから、そうなって欲
しくないという願いが虐待の背
景をかたちづくっているとした
ら、そうでは無い方法を提示す
ることが必要だろう。そこから
対応を考えていく賢明さを持ち
たいものである。

しつけと虐待に位相の違いを
見いだしかねる昨今だから。

現場から

それぞれ成長

遠藤 恵里香

時がたつのは早いもので、もう年度の終わりが見えてきています。慌ただしい日々の中で、子どもたちは成長を見せてくれています。

年中の菜々は近頃、「歯いたい。」と泣くことが多く、いつもは大好きなお肉と白ご飯をもうもり食べるのに、十分に食べられない状況が続いています。

心配に思い歯科通院すると、痛みの原因は下の歯の一番奥から永久歯が生えてきているためだということがわかりました。菜々は以前から乳歯が抜けて永久歯が生えてくるお兄さんお姉さんを見ては、「菜々もはやく歯抜きたい。」と話していたため、診断を受けともうれしかったようです。

完全に永久歯が生えてくるまで痛みはあるようですが、原因がわかっている菜々はもう泣いたりせず、反対側の歯でモリモリご飯を食べ、歯磨きの際は自分で生えかけの永久歯を優しくブラッシングしています。そんな

な姿をちよつぱり頼もしく見えています。

小学3年の凜は年長から剣道を習っています。習い事を始めるきっかけは本人が「やりたい！」と強い希望を出したことです。この年度が始まってからは、剣道の日が近づくと、「うちもう剣道辞めたい。」と言出し、剣道の日になると「今日剣道行かなくていい？」と毎週のように言っています。

しかし、本人のやる気とはうらはらに、天性の通る声質と負けん気の強さからか、大会や練習試合ではそれなりに結果を残してくるのです。ご指導くださる方からも、練習の度にお褒めの言葉を頂き、期待していただいているようです。凜も期待されているということが分かっているのも、やめたいと言いつつも、期待に応えなければと思っているようです。

年度の後半から徐々に剣道の練習試合に参加したり、大会の団体戦メンバーに選ばれたりと忙しくしていました。そんな中

凜が、ある練習試合に参加したあと、「今日の練習試合めっちゃ楽しかった。また練習試合あったら出たい！」と話すことがありました。そのあとからは剣道に楽しく打ち込んでおり、活き活きとした表情で練習の様子を聴かせてくれます。

つい先日、楓の13回目の誕生日を祝うことができました。今年も楓の前担当保育士の方に来ていただき、一緒にお祝いすることができました。

光の子どもの家の誕生日会では、誕生者へお祝いのメッセージを伝えるのですが、楓は例年前担当の方からのメッセージを聞いては涙を流していました。ですが今回の誕生日会では、泣かずにしっかりとメッセージを聞いてお礼を述べていて、ちよつぱり大人になったなど感心しました。

また、今回の誕生日を受けて、初めて今まで連絡を取り合っていないかった母と祖母へ手紙を送りました。楓はこれまで進展のない家族関係に「どうせ何もわからない。」と半ば諦めの気持ちを持っていました。

今年度少し進展があり、手紙のやりとりができるようになり

ました。楓は喜んでいましたが、いざとなると躊躇してしまい、なかなか手紙を送れずにはまりました。

今回は私と連名で手紙を出すことにしたのですが、私が「何か書くことある？」と聞くと、しばらく考え、「やつぱ名前だけでいい？」と聞き、私が書いた手紙に自分の名前だけを書き加えました。きつといろいろ聞きたいことがたくさんあったのだとは思いますが、今は名前を書くだけでいいいっぱいなのだと思います。それでも楓がやつと「家族」というものと同じ合えた瞬間であったと思います。

きつとこれからも楓だけでなく、ここで暮らす子どもたちは家族関係を含め、様々な葛藤があるかと思えます。それらと向き合い、自分自身でどう折り合いをつけていくのかを私は見守っていきたいと思います。

子どもたちの心身ともに成長した姿が見られることを願っています。



お詫びと訂正とお知らせ

前188号の日誌抄で、若月健悟牧師のお名前を「若月健吾」としていました。ここにお詫びして、訂正いたします。

光の子編集委員会

今年のクリスマスツリーづくりは、ラミネートフィルム(A3)と透明折り紙を大量に使う予定です。ご提供いただければ幸いです。よろしく願ひいたします。

光の子どもの家 クリスマスツリー制作担当 黒川

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2018年12月2019年1月

2019年1月現在

幼児6名 小学生10名 中学生9名 高校生8名 他2名 計35名

12月

2日 クリスマスを待ち望む第1アドベント礼拝と夕食会

9日 東京女子大学の佐野正子教授による第2アドベント礼拝&夕食会 感謝

16日

バカボンクラブの皆様がサンタ衣装でバイクにまたがり子どもたちにプレゼントをくださる。感謝 大高晋一郎氏による第3アドベント礼拝&夕食会 感謝

17日

日本社会事業大学の藤岡孝志氏による施設内職員研修 感謝

22日

グロッケンシュピールの芹沢美保様より招待いただいたハンドベルコンサートへ 感謝

LUNA SEAのSUGIZO様よりご招待いただいたLUNA SEAクリスマスコンサートへ 感謝

23日

クリスマス間近、第4アドベント礼拝&夕食会

24日

クリスマスイブの夕食会&キャンドルサービス礼拝 蠟燭の光のみで子から担当、担当から子へメッセージ。深夜にはサンタクロース来訪

25日

クリスマス、お客様を招いて聖誕劇(ページェント)を披露、その後祝会

28日

餅つき、子どもも大人も張り切る

31日

大晦日、卒園生も顔を出し、年末を過ごす

1月

1日 元旦礼拝&祝会 多くの卒園生も顔を出し、新年の抱負を述べる

2日 卒園生の会 卒園生、卒園生職員で夕食会

~ 子どもたちが各担当、関係職員とそれぞれ外出するなどして正月3日を過ごす

5日 正月気分をぶっとばそう会 冬休みの思い出、反省等を発表

11日 卒園生安田君、三浦さん祈念礼拝

14日 卒園生安田君、渡部君の墓参へ 卒園生、元職員も来訪

18日 光の子どもの家後援会によるうどん玉作り 感謝 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝

19日 光の子どもの家後援会によるうどん打ち&頑張ろう会 感謝

31日 通報避難訓練

<寄贈者各位>

マルハン古河店 ㈱なとり バカボンクラブ マルキチ物産 東埼玉バプテスト教会 落合水尾 白ゆり美容室 菊地友枝 小林幸子 大橋清栄 斉藤直子 川村孝夫 松岡享子 浜田文昭 須賀川教会 太田春夫 吉羽良美 王子教会 全ヤオコー労働組合 木暮伸二 豊国道江 金子光代 株式会社ゴルフ・ドゥ 日本鏡餅組合 小澤あゆみ 埼玉県書店商業組合 彩の国総合研究所 ほっともっと 毎日新聞東京社会事業団 セカンドハーベストジャパン 山田智 山田裕子 小林可奈 市川美津子 金子智幸 川島健 高橋久仁雄 春野仁鳴 平林恵子 ムーンバット株式会社 松本明子 櫻井秀夫 Yakult ネットヨタ東埼玉株式会社 SUGIZO (LUNA SEA) 藤沼畜産 戸石幸男 他多数の皆様

<ボランティア各位>

山田智 山田裕子 岡本有代 向井進 常松洋介 山田義人 加藤瑠海 山中拜 他多数の皆様

☆春らしくなってきました。新年度に向かう子どもたちの応援よろしく願ひします(黒川)

/// // 反 射 光 // //

事務所棟が増築されました。年度末の総括や来年度の計画をつくりつつ、工事に伴うものの移動も。あつという間に過ぎた年度末▼この子は物品管理が課題で失くしものが多く部屋も汚くなりがち、どんな関わり方がこの子にとってよいのだろうか?▼そう言っている私たち自身もあまり得意ではなくて、「あのペンはどこ?」「賛美歌が棚から溢れてる!」「献品が整理できてない!」▼これを機に、隼より始めよ。不要品を捨て、物の置き場所を改めて、子どもの手本になれるように。工事も整頓もまだまだ続きます▼生活の場は照らしすぎ陰を大切にと建てられた光の子どもの家。子どもが宿題をやるには暗くデスクライトが必要ですが。しかし足下をコードだらけにはしたくない▼安価な乾電池式のライトを買ったが、照らされる範囲が狭くいまひとつ。工夫でなんとかなるものか、高価でも質を備えたものを買うべきか。光の悩みも当分続きそうです。(義)